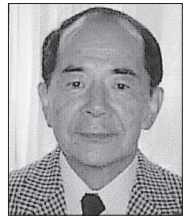


## 高校の英語の先生方に私が勧める本



元つくば国際大学教授

佐藤 猛郎

私自身が高校で英語を教えていた頃の経験から、ジャンルを3つに分けて紹介したいと思う。

まず第1に、英語語法と文法の参考書は欠かせない。生徒から文法事項の質問をされて、それに上手に答えられないときほど困ることはない。私が推薦するのは次の2冊だ。

安井稔『英文法総覧(改訂版)』(開拓社)

江川泰一郎『英文法解説(改訂3版)』(金子書房)

いずれも複雑な英語の語法の全体をカバーしていて、説明も実に明解だ。他に詳しい本も出ているが、英語学の専門家以外はこれで十分だろう。

2番目に、教員には雑学も要求されるから、英国やアメリカの歴史や文化の解説書も貴重だ。少しデータが古くなっているかも知れないが、私は次の2冊を推薦しよう。

小池滋ほか『イギリス(読んで旅する世界の歴史と文化)』(新潮社)

今井宏ほか『新版 概説イギリス史』(有斐閣) 同じシリーズで、前者には、亀井俊介ほかによるアメリカ編、後者には、有賀貞ほかによるアメリカ史があるので、アメリカ事情を知るときには参照にして欲しい。

最後に挙げるのは文学書だが、人生経験の乏しい若い英語科教員にとって、文学作品は人生の機微についてのたいへん貴重な情報を与えてくれる。しかし文学については、個人的に好みも違うので、様々な取り組み方があると思うが、とりあえず私の場合を紹介してみよう。

まず古典だが、シェイクスピアを古典の代表とすることに異論はないだろう。ただこれを個人的に読み続けるのは困難だったので、私たちは英語教員の有志で「輪読会」を開き、シェイクスピアの作品を年間2、3作読むことにしていた。これでかなりの数の作品を読めたため、海外でシェイクスピア劇を見るときも、あまり違和感がなかつ

た。

次はまったく私の個人的な好みの読書だが、オスカー・ワイルドの作品に夢中になっていた時期があった。機知に富んだ警句がちりばめられている彼の作品、たとえば『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*)などを読んで、彼の気の利いたパロックス表現に圧倒され、気に入った1節を次々にノートに書き写したりしていた。このようなことをするのは私だけかと思っていたら、作家のサマセット・モームも若い頃ワイルドの警句集のノートを作っていたことを知り、私ばかりではないな、と苦笑いをした次第だ。また歴史小説作家ウォルター・スコットの『ウェイヴァリー』(*Waverley*)も愛読書の一つで、読み返してみると、今でも胸に熱いものを覚える。

最近の英米文学の動向についてはあまりよく知らないが、私が新米教師だった頃は、すぐれた才能を持つ作家が続々と現れ、私たちに快い読後感と感銘を与えていた。英国では上記のサマセット・モームが画家ゴーギャンをモデルにした『月と6ペンス』(*The Moon and Sixpence*)や、何とも不思議な女性を描いた『お菓子和ビール』(*Cakes and Ale*)などという作品を出していたし、グレアム・グリーンはカトリック神父の苦悩を描いた『事件の核心』(*The Heart of the Matter*)や、人妻の恋愛を描いた『情事の終わり』(*The End of the Affair*)などを書いていた。後者は若い世代にとくに人気が高かったように思う。アメリカ文学でも、アーネスト・ヘミングウェイが名作『武器よさらば』(*Farewell to Arms*)を発表し、テネシー・ウィリアムズが現代劇『欲望という名の電車』(*A Streetcar named Desire*)を出して、文学界に旋風を巻き起こしていた。これらの作品はインターネットで手にはいるので、ぜひお手にとって読んでいただきたいと思う。